【土木計画学研究・講演集 No.15(1) 1992年11月】

日本におけるヴィスタ設計の受容と変容に関する研究

The Adoption and Transformation of Vista Composition in Japan

平野勝也*、篠原 修**

By Katsuya HIRANO, Osamu SHINOHARA

Japan has been adopting the Modern Western style as a model of urban design since the Meiji era. In order to find our own way for future urban design in Japan, it is important to investigate and analyze the various phase of adoptions. Thus we investigate and analyze the adoption of Vista composition, which is one of the most popular methods in urban design in Modern Western world, in this paper. As a result, various types of transformation are categorized and our own concepts of urban design emerged. These results suggest that we should re-establish modern Japanese methods in urban design.

1．はじめに

（1）研究の背景

最近、アメニティーや景観に対する関心の高まりとともに景観やデザインに配慮した設計が行われるようになってきた。それ自体は歓迎すべきことであるが、そこに問題がないわけではない。街や構造物の表面を飾り立てているだけの「お化粧」が、長期に亘って都市の魅力を醸し出し続けるか甚だ疑問だからである。

お化粧や単品のデザインにとどまらない何らかの秩序に従った都市景観を求めるのであれば、個々のデザインが拠り所とすべき都市形成の原理、つまり「都市景観設計原理」といったものを考える必要があるように思われる。しかし、そのような都市の風土やアイデンティティーを踏まえることのない施設・建築の単体のデザインやウォーターフロント等の面的開発が、相変わらず、その都度の欧米のトップモードに従って設計されている事例も多い。本研究は、日本に固有の都市景観設計原理を見出そうとする１つの事例研究として位置づけられる。

キーワード：ヴィスタ設計　都市景観設計原理
＊　学生員　東京大学大学院工学系研究科土木工学専攻
＊＊正会員　工博　東京大学工学部土木工学科　教授
〒113　東京都文京区本郷7-3-1東京大学工学部測量研究室

（2）研究の着眼点

日本では、明治より都市設計の分野でも近代西欧をモデルとしてきた。江戸時代の日本には、固有の都市設計手法が存在したにも拘らず[1]、明治維新とともに近代西欧化が第一義となった。一般に異文化は、その導入に際し、土着の文化との葛藤を起こし、採用される所が限定され、更に何らかの変容を起こしながら定着して行くとされている。都市設計もその例外ではない。つまり、明治以来の近代西欧の都市設計手法の導入においても何らかの葛藤が存在し、様々な受容や変容の形態が存在するのが当然と考えられる。この様な都市設計における西洋手法の日本での受容、変容を分

析することは、今後も引き続いて西欧化、近代化を避けて通ることの出来ない日本の都市設計に対し貴重な示唆を与えると言う意味において重要であろう。更には、西欧近代化によっても押さえ付けることの出来なかった日本のアイデンティティーとは何であったかを知る上でも重要と考えられる。

本研究は以上のような視点より、日本におけるヴィスタ設計の受容と変容に関し調査分析を行おうとするものである。都市設計の観点からヴィスタ設計を扱った既存研究はなく、公園設計思想史の一部として取り上げられているにとどまっている[2)]。

本研究がヴィスタ設計に着目するのは、世界中で隆盛を極めた近代西欧の代表的都市景観設計原理であるバロック式都市設計の構成、即ち

a）ヴィスタ設計

b）ヴィスタ設計の連担による軸線構成のネットワーク

の基本単位であるからに外ならない。

2．研究の目的

以上のような考えに基づき本研究は

a）近代西洋の都市景観設計原理の代表であるヴィスタ設計の日本での受容と変容の実態を明らかにすること。これを基にb）日本の都市設計のアイデンティティー（固有性、独自性）について考察すること、更には、c）日本の将来に亘る都市景観設計原理に何らかの示唆を与えること、を目的とする。

3．研究の対象及び方法

（1）研究の対象

本研究は、明治より現在までの主に東京都内のヴィスタ設計・軸線構成を対象に、事例調査（現地調査・文献調査）により議論を進める。事例調査は、適用場所の種類毎に検討した。

本研究で言う「ヴィスタ設計」とは以下の定義に従うものとする。

a）対象街路が直線街路であること

b）沿道の並木若しくは建造物により、統一的に街路焦点方向へ視線を誘導しているもの
（「絞り」の存在）

c）街路焦点に象徴的建造物等が存在し尚且つ、建造物と対象街路の中心軸が、ほぼ一致していることの３要件を満たしその他の阻害要素等を含んでいないものをヴィスタ設計と呼ぶ。日本においては、ヴィスタ設計は、変容をきたしており、それら変容をしたものも含め「ヴィスタ型設計」と呼ぶこととする。

なお本調査は、ヴィスタ型設計の完成時点について調査したもので（但し、竣工当時の様子がわからないものについては現況に頼った）、文献等に基づく設計者の意図まではしていない。（ヴィスタ設計は形態が明解であり、設計者がヴィスタ設計を意図したかどうかは、その完成したものを見るだけで十分であると考えた為）よって、以下の議論もその完成形を基にした議論であることを断っておく。

（2）事例調査方法

ヴィスタ型設計の事例の拾い上げは、以下の通りである。現存する事例については、一般市街地にある事例を１万分の１の地図によりくまなく探し、さらに、中規模以上の公園、主要大学キャンパス、地上駅前を同様に１万分の１の地図等により総当たりで拾い上げた。また現存しない事例については、都市計画史、公園計画史、主要大学のキャンパス変遷等も併せて調査し漏れのなきよう努めた。

本調査は、このようにして拾い上げた事例を対象にに現地調査・文献調査を行い、近代西洋のヴィスタ設計に対してどの様な変容が見られるかを中心に分析を加えたものである。

4．事例調査の結果とその分析

（1）適用された場所

事例調査により拾い上げられた事例を場所別にまとめると表１の様になる。

表1　ヴィスタ型設計が実現した場所

場所	Vista型設計		軸線構成		調査対象
	数	代表例	数	代表例	
一般市街地	2	国会議事堂前	0	——	都市全域
公園	4	神宮外苑	0	——	中規模以上でヴィスタ型設計が可能な公園 108公園
駅前	3	東京駅	3	田園調布	都内地上駅 333箇所
大学	11 内1例が慶応日吉	御茶の水女子大学	1	東京大学	都内4年制大学 98校

あれ程、西洋化近代化に努力したにも拘わらず、採用事例は驚くほど少ない。この要因は、一般的には次のように考えることが出来る。

①設計体制の問題

ヴィスタ設計は、その性質上、街路焦点の象徴的建造物と街路及びその沿道建築の一体設計を必要とするが、日本では土木と建築にその設計主体が分かれることが多くヴィスタ設計を採用しにくかった。

②ヴィスタ設計にふさわしい象徴的建造物の欠如

日本では、象徴的建造物は伝統的に重層構成[3]の中に存在し、街路を直接当てるような建築物が非常に少なかった。

③地形的問題

ヴィスタ設計ひいてはバロック式都市設計を採用するには東京は起伏が激しかった。

④権力の問題

西欧でもヴィスタ設計は権力の象徴として採用されることが多かった。しかし、日本では西欧のような絶対権力は存在せず、ヴィスタ設計はあまり意図されなかった。

⑤設計思想の問題

伝統的設計手法、都市観、自然観を背景とする設計思想の相違による忌避。

⑤の設計思想の問題は5（2）（3）で議論することとして今回の調査結果をもとに考察を加えると次のように言えよう。

ヴィスタ型設計が採用された場所をみると大学が圧倒的に多く、その他では少ないと言える。これは、キャンパスには建築と街路を一体化して設計しうる環境があり、しかも、講堂、図書館等を象徴的建造物として合意、共有できるため、他に比してヴィスタ型設計を採用しやすかったものと思われる。同様に公園も敷地内で設計が完結し、一体設計が可能な空間であるが、一般に西洋でも宮廷庭園にしか象徴的建造物は存在せず、始めから大衆を相手とする公園では適用事例少ないのも当然と言えよう。建築と街路の一体設計はヴィスタ設計には不可欠であり、既存建築に合わせてヴィスタ型設計としたものは、国会議事堂前だけである。それ以外のものは駅前にしろ一般市街地にしろ例外的に一体設計が可能であったものにしか採用されていない。

結局、東京の都市骨格が江戸の都市設計により決められていたことに加え、要因の①②が大きく働いて採用が極度に限定されていたと考えるのが妥当ではないだろうか。なお、軸線構成については、駅を中心とした例が3例あるにとどまっている。

（2）変容の類型化

調査した事例では、変容のほとんどない4例の他は、何らかの変容が見られた。それらは、

a）ヴィスタ設計の要素は備えているが構成が不完全なもの（構成不完全型）

b）ヴィスタ設計に必要な要素が欠落してしまっているもの（要素欠落型）

c）ヴィスタ設計での役割分担が転換してしまっているもの（役割転換型）

d）本来、ヴィスタ設計の要素でないものが付加されているもの（要素付加型）

の4つに大別された。

構成不完全型は、街路の軸線と象徴的建造物の軸とが、ずれたり傾いたりしているものである（図1）軸が傾いているものについては、西欧のヴィスタ設計でも、意図的に振ったものがあるので[4]、一概にうまく模倣できなかったとは言えないが、パリの例のように高度なテクニックを用いたとは考えにくいため、不完全型とした。

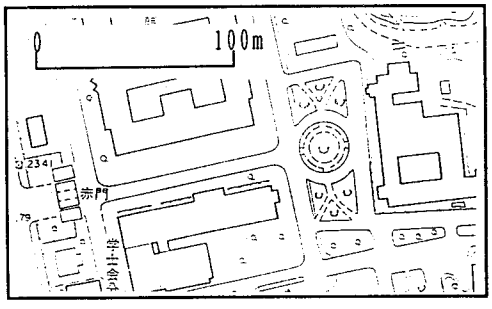

図1　軸の傾きの例　東大医学部2号館
（図は都市計画基本図を縮小したもの）

要素欠落型の変容は絞りの欠落及び不連続なものや、アイストップがないもしくはその効果が弱いもの（写真1）等があった。このようになってしまう理由は前節で述べたとおりである。

役割転換型の変容には、象徴的建造物を目立たせる脇役のはずである並木が逆に重視され、キャノピードランドスケープ（天蓋景観）を形成したりして、本来主役であるはずの象徴的建造物を見え難くしてしまっているもの（写真2、「並木重視型」）、また本来、並木で絞りの効果を出すべき所に日本庭園風の植栽が施され絞りの役割を失い、日本風を演出するという役割に転換してしまっているもの（写真3、「日本庭園風植栽型」）等が、見られた。日本庭園風植栽型は日本の伝統手法と平面図的なヴィスタ設計との折衷であろう。並木重視型の変容の一つのパターンは、完成当初は、西洋のヴィスタ設計に近いものでも、時が経つに連れ、主役が象徴建築ではなく並木になってしまうパターンである。この原因は、日本人には建造物より並木の方がイメージの拠り所として重要だった為と思われる。もう一つには、最初から西洋のヴィスタ設計の理解が浅く象徴的建造物の建設は後回しにし、並木だけを取り入れた変容も存在する。或る意味では、日本の並木のある街路はすべてこちらのパターンであり、日本が西欧から近代都市設計を学ぶ際、ヴィスタ設計に付随する広幅員並木付き直線街路つまりはブールバールだけを模倣したと分析する研究もある[5]。

要素付加型の変容は基本的に「障り」[6]の混入が主体であった。「障り」は象徴的建造物の前のロータリーに植樹されるもの（写真4）や、象徴的建造物のファサードに平行に植樹されるもの、更に、象徴的建造物の前に樹木を散在させるものといった形で見られた。この様な変容は非常に多く、日本の伝統手法の根強さが現われていると言える。

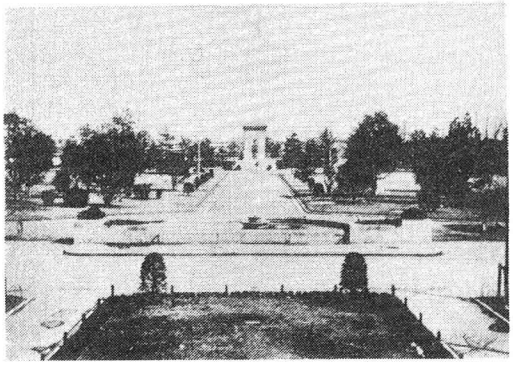

写真1　象徴性の弱い例　浜町公園（竣工当時）

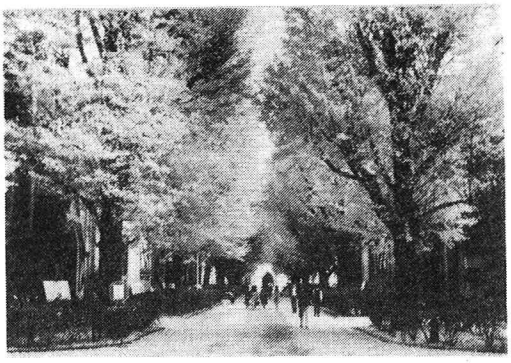

写真2 並木重視型の例　東大安田講堂前
（竣工当初より銀杏並木は計画されていた）

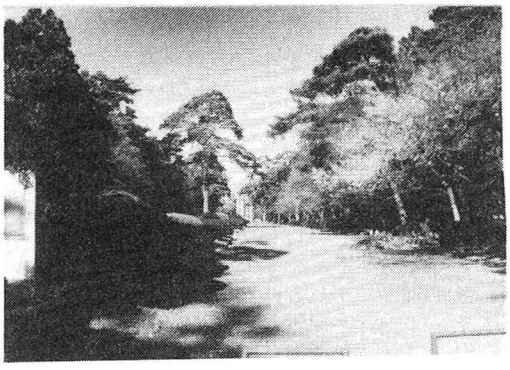

写真3　日本庭園風植樹型の例　多磨霊園
（写真は現況だが竣工当初のままである。）

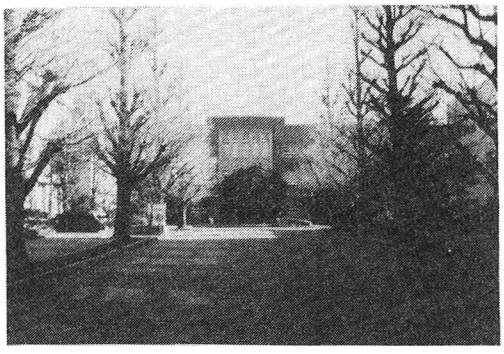

写真4　障りの例　お茶の水女子大徽音堂
（写真は現況だが竣工当初のままである）

このような変容のパターン化をまとめると表2のようになる。また、調査を行った全事例を、竣工年代に図2にまとめて示す。

（3）日本の伝統的手法と変容の関わり

以上見てきたように、日本でのヴィスタ設計の変容には日本の伝統的手法がそこ、ここで見え隠れしている。日本の伝統的手法との関わりを軸に変容を捉え直してみると、図3の様に整理できる。

この図3からヴィスタ設計の日本への適用においては、厳然と日本の伝統的手法が影響していることがわかる。単に、真似が下手だったと考えられるのは、殆ど変容のないヴィスタ型設計にたどり着く前に並木重視型で終わってしまったもの、絞りの不完全、軸ずれだけである。その他の変容が正確な西洋のヴィスタ設計の再現から日本の伝統手法の方へシフトしているものであることが判ろう。つまり、真似が下手なのではなく嫌ったのであり、根本的な抵抗があったと考えられる。この点を、検証してくれているのが、一旦、殆ど変容のないヴィスタ設計を実現しておきながら、時間の経過とともに主役が象徴的建造物から、並木に移ってしまった変容例である。これは、結局、日本人には、象徴的建造物を裸でさらすことは受け入れられなかったことを示していると思われる。

つまり、これらのことは、日本の都市設計の西洋化の流れの中にあっても、その伝統的手法が強い影響力を持っていることを表し、更には、その背後に日本固有の設計思想が存在することを意味すると思われる。

表2　ヴィスタ型設計の変容分類

変容分類 ＼ 適用場所とその総事例数		一般市街地	公園	駅前	大学	小計	合計
		2	4	3	19	28	28
変容殆ど無し		2	1	0	1	4	4
構成不完全型	軸線のずれ	0	0	2	1	3	3
要素欠落型	絞りの不完全	0	0	0	4	4	7
	アイストップ弱し，無し	0	3	0	0	3	
役割転換型	並木重視型	0	0	1	6	7	9
	日本庭園風植樹型	0	1	0	1	2	
要素付加型	ロータリー植樹型	0	0	0	8	8	11
	ファサード平行列植型	0	0	0	2	2	
	樹木散在型	0	0	0	1	1	

注：複数の変容を来たしている事例についてはそれぞれでカウントした。但し、日本庭園風植樹型については当然絞りが弱くなるので絞りの不完全ではカウントしていない。

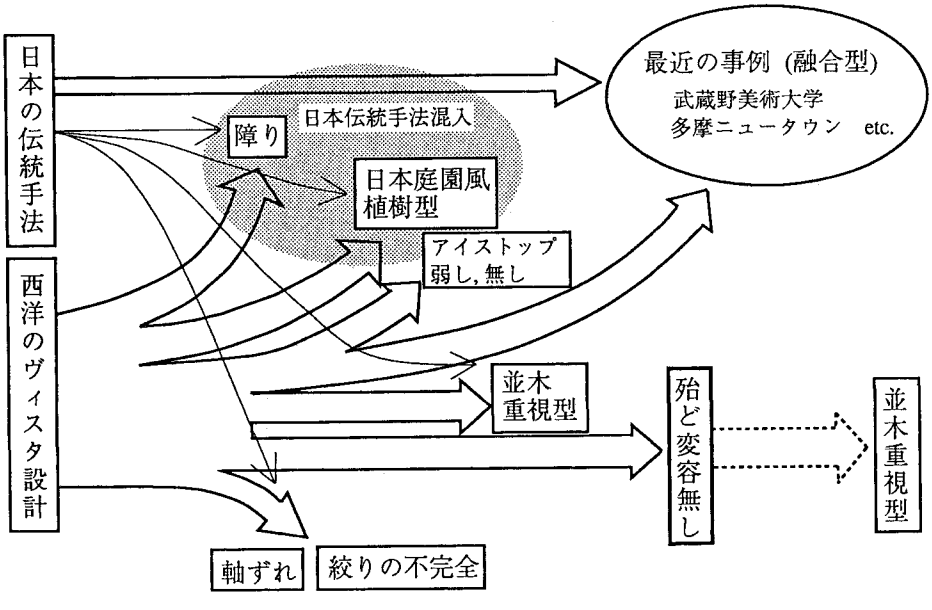

図3 ヴィスタ設計と日本の伝統手法との関わり

＼年代 適用場所		M33 1900	M43 1910	T9 1920	S5 1930	S15 1940	S25 1950	S35 1960
主な出来事				※都市計画法制定 ※関東大震災		※終戦		
変容殆どなし					◇明治神宮外苑絵画館 ☆東京女子大学図書館			○国会議事堂前 ☆慶応日吉記念館
構成不完全型	軸線のずれ・傾き			△東京駅	△国立駅前大学通り ☆お茶の水女子大学徽音堂 ☆東京大学医学部２号館			
要素欠落型	絞りの不完全弱し	☆ 青山学院ガウチャーホール	☆青山学院新ガウチャーホール ☆青山学院大講堂弘道館 ○赤坂離宮前		☆津田塾大学ハーツンホール			
	アイストップなし・弱し		◇新宿御苑		◇浜町公園			
役割転換型	並木重視型				△田園調布 ☆東京大学安田講堂 ☆東京大学図書館 ☆東京大学工学部１号館 ☆東京工業大学本館			☆国際基督教大学礼拝堂
	日本庭園風植樹型		☆青山学院新ガウチャーホール ☆青山学院大講堂弘道館		◇多磨霊園噴水塔			
要素付加型	ロータリー植樹型		☆青山学院新ガウチャーホール ☆青山学院大講堂弘道館		☆青山学院女学院校舎 ☆青山学院間島記念館 ☆東京大学工学部１号館 ☆お茶の水女子大学徽音堂 ☆東京大学医学部２号館			
	ファサード面平行列植型				☆津田塾大学ハーツンホール ☆東京大学工学部１号館			
	樹木散在型				☆東京農工大学本館			

凡例　○：一般市街地　◇：公園　△：駅前　☆：大学

図２　ヴィスタ型設計の竣工年代

5．結論・考察

（1）結論

以上の調査及びその分析により

a）東京に限定はされるがヴィスタ設計の日本での受容と変容の実態が明らかとなった。

b）4（1）にまとめたように様々な日本的理由により適用されたヴィスタ設計は極端に少ない。また、適用された事例も伝統的手法の影響により大幅な変容を遂げていることがわかった。（その背後にある思想については以下の（2）で述べる。）

c）日本の今後の都市景観設計原理は自然依存を取り入れた方向の都市設計手法の開発を行うべきではないかという示唆を得た。（以下の（3）で、より詳細に述べる。）

（2）都市設計に対する日本のアイデンティティー

前章の変容の分析において、抑えようとしても抑えきれなかった日本の伝統的手法が日本のアイデンティティーを示唆していると述べた。日本庭園の技法である障り、そして、市中に象徴的建造物がないことの原因であった重層構成。一体、これらの日本の伝統的手法の背後にある思想とは何であろうか。

日本の伝統手法、設計思想に直接的に取り組んだ諸研究、すなわち、槇文彦が「見え隠れする都市」[7]において日本の空間構成の分析と日本の風土を基に抽出した「奥の思想」[8]や、樋口忠彦が「日本の景観」[9]において日本の風土や古来より街が立地してきた場所の分析により結論づけた日本の街の「自然依存性」[10]は、本研究で明らかとなったヴィスタ設計の変容の方向を思想的に支持するものである。ヴィスタ設計は、街路とその焦点の建築によって、都市内のみで街路景観を強烈に印象づける手法である。しかし、今迄、自然を拠り所としていたものが、にわかに建築物を拠り所とすることには思想的な困難がある。また、受容されたとしても、当然素直に再現することには抵抗があり、それが障りとなって現われたと考えることが出来る。並木重視型の変容も、自然を重んじる思想的伝統を考えれば頷けるのである。

すなわち、西欧化の流れにおいても、日本の伝統的手法が深く関与し、依然として都市設計においては自然依存という思想がアイデンティティーとしてそこにあることを示唆していると考えられる。

（3）日本の都市景観設計原理への示唆

これまでの考察は、今後の日本の都市景観設計原理が、日本のアイデンティティーとしての「奥性」や「自然依存」を再評価し、積極的に取り入れて入ったものでなければならないことを示唆していると思われる。例えば、「山当て」[11]や「汐見坂」[12]等は、積極的に見直され、取り入れて行くべきデザインボキャブラリーなのではないだろうか。

最近、多摩ニュータウンでは街作りに対し積極的な試みが多数なされており、その一つに、「山当て」を用いてイメージ軸を形成しようとしている例がある（写真5）。同じ多摩ニュータウンの中には、駅からの街路を「パルテノン多摩」に当てることにより、依然としてヴィスタ型設計でイメージ軸の形成を狙っている例（写真6）も存在する。しかし、パルテノン多摩の街路焦点にあたる部分は、多摩中央公園への階段に過ぎず、この階段を上がると一気にそれ迄見えなかった多摩中央公園の池が眼前に広がるというシークエンス型の景観構成になっている。「自然依存」とヴィスタを変容させた仮ヴィスタ（アイストップ・シークエンス型）の好対照の事例として注目されよう。

写真5　多摩ニュータウンの山あて（伝統的手法）

写真6　多摩ニュータウンのヴィスタ型設計（融合型手法）

6．残された課題

本研究においては、大きな問題はないと判断して調査しなかったが、当時の設計者の意図を当時の文献を調査する等により補足する事が、本研究の議論をより正確にするであろう。

また、都市景観設計原理の追求のため、本研究と同様なアプローチにより、他の西洋の手法が日本に導入された際の受容、変容等の分析も本研究の結論を拡充し、豊かにするための重要な研究課題であり、それと同時に新たな都市景観設計原理へ向けての提案や、検討が現実に要請されている切実な問題であろう。

引用文献・補注

1）樋口忠彦「日本の景観」春秋社　1981
　槙　文彦「見えがくれする都市」鹿島出版会1980等多数の文献において言及されている。
2）小野良平
「震災復興期にいたる公園設計の史的展開について」
造園雑誌　53(5)　pp73～
3）重層構成とは日本の伝統的手法の一つで、権力や宗教の象徴的建造物に対して用いられたものである。外から中心に向かって一つ内側の層に入る度に権威がまして行くというもの。お城によく見られる。また神社の鳥居はこの重層構成の一つ奥の空間にはいる入口にあるものである。
4）少し傾いている方が印象的になるという効果を狙ったもので、パリのチュイルリー宮や、それに則った新凱旋門等で見られる。
5）引用文献２）
6）日本の伝統的な手法で「滝の障り木」のように見せたい対象を少し隠すことによって見せたいものに奥ゆかしさ等を持たせる技法
7）槙　文彦「見えがくれする都市」鹿島出版会　1980
8）「奥の思想」日本では奥に行くほど神秘性、儀式性を求める奥性を持つ空間構成をとる。
9）樋口忠彦「日本の景観」春秋社　1981
１０）樋口は必ずしもこの様な言葉を用いていないが、日本人が古来、どの様な場所に住んできたかの分析により、山懐と言った自然に抱かれるように住んできたと結論づけている
１１）街路等の焦点に山がくるように街路を配置する日本の伝統的手法で江戸で多く見られた。自然依存の設計手法である。
１２）坂の先に海が見える坂。江戸で多く見られた。

参考文献

鈴木理生「江戸の都市計画」　三省堂　1988
石田頼房「日本近代都市計画の百年」　自治体研究社　1987
藤森照信「明治の東京計画」　岩波書店　1982
篠原　修「都市のイメージ骨格形成と土木ー東京を例にー」
土木学会論文集　第415号　1990
篠原　修「日本の街並と近代街路設計」
土木学会誌　pp2～15　1984
篠原　修「街路景観設計における西欧近代都市のイメージ」
ＩＷＰＦ　風土分析国際ワークショップ・イン京都
VOLUME 3 pp29～　1990
ｴﾄﾞﾏﾝﾄﾞ.N.ﾍﾞｰｺﾝ著　渡辺定夫　訳　原題
「Design of the Cities」/邦題「都市のデザイン」
鹿島研究所出版会　1968 原著1967
ﾊﾜｰﾄﾞ.ｻｰﾙﾏﾝ著　小沢　明 訳
「パリ大改造　ーオースマンの業績」井上書院　1983
松葉一清「パリの奇跡ーメディアとしての建築」
講談社現代新書　1990
彰国社編「日本の都市空間」1968
青山学院８５年史 ほか主要大学史
「多摩ニュータウンー１０・１１住区　基本設計報告書」
住宅都市整備公団南多摩開発局　1986
「多摩ニュータウンの新しい街づくり　落合・鶴牧地区」
住宅都市整備公団南多摩開発局　1986
梅棹忠夫「日本とは何か　近代日本文明の形成と発展」
ＮＨＫブックス　1986